

2011年3月20日 日本基督教団 春採教会 主日礼拝説教 説教者：田村毅朗

聖書箇所：使徒言行録 第14章21節?28節、説教題：『信仰に踏みとどまるように』、

讃美歌：545、28、216、280、541

今までの説教でも申し上げているように、昨年4月から読み続けています使徒言行録は、ルカによる福音書を記した福音書記者ルカが記したとされています。そのことは、使徒言行録第1章の冒頭部分を読みますと理解出来ます。「テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました」。つまりルカは第二巻として使徒言行録を記しました。ということはルカ福音書に記されている福音書記者ルカの思いが、使徒言行録にも色濃く反映されているのです。

使徒言行録の前半では、ペトロが活躍しました。そして後半は、回心をしたパウロが活躍するのです。今朝の御言葉でも小見出しにあるようにパウロたちがシリア州のアンティオキアに戻ることが丁寧に記されています。と同時に、今朝の大きなポイントである22節の御言葉「弟子たちを力づけ、『わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない』と言って、信仰に踏みとどまるように励ました」は、パウロたちが語ったメッセージなのですが、同時に、福音書記者ルカの思いが色濃く反映されたメッセージでもあるのです。

先週一週間、私達は東北関東大震災の様々なニュースを見続けました。NHKは、通常番組をカットして、様々な角度から震災の報道を続けていました。幸い、先週の説教で皆様に報告させて頂いた宮城県石巻で生活している私の父の兄と二人の弟は、無事が確認出来ました。先週の火曜日、午後2時21分に石巻の叔父さんから待望のメールが届きました。「ありがとう。地震の後の津波で床上浸水。家がめちゃくちゃ。でも全員元気」。短いメールでしたが、言葉の重みを感じました。そしてすぐに叔父さんの携帯電話に電話を入れました。すると、それまでは全く繋がらなかったのですが、呼び出し音が鳴り、そして心配していた叔父さんの声が聞こえてきたのです。私は叔父さんの声を聴いた瞬間、涙が溢れ、言葉が続きませんでした。私の父は、男ばかりの4人兄弟ですが、父だけが石巻を離れ、大学卒業と同時に東京で働くようになりました。父の兄、と二人の弟はずっと石巻で生活しています。その中でも今回、メールをくれた叔父さんは私が小さい頃から私をかわいがってくれ、今年の夏はバイクで石巻から釧路まで遊びに来る予定でした。しかし、仕事の

都合がつかず、来ることが出来ませんでした。そのときに連絡をしてから、ずっとご無沙汰していたのです。その叔父さんが少し沈んだ声で「みんな元気だ。でも、家も車も駄目になってしまった」とぼつりと語った声は、今も私の心に響いています。幸い、私の叔父さんや従兄弟の命は守られました。しかし、石巻に住む方々の死者は叔父さんから連絡のあった15日の時点で既に425人。そして行方不明者は最終的に1万人に達すると予想されています。石巻市だけでも、とんでもない被害があることを知り、今回の地震と津波の被害の大きさに言葉を失います。メールをくれた叔父さんは、合唱の趣味があり、キリスト者ではありませんが、仙台宗教学音楽合唱団に所属し、先日はバッハのロ短調ミサ曲を歌ったようです。その叔父さんが今回の震災をどのように考えているのか気になります。

ところで、今回の大震災について私達キリスト者、そして毎週のように熱心に教会に通っている求道者の皆さんは、どう受け止めたらよいのでしょうか？震災から一週間が経過しても、まだ被害の全体像がつかめず、同時に、福島県原発の被害も拡大している中で、簡単には答えが見つからないと思います。しかし、先週一週間の中で今朝の御言葉、特に22節「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」を覚えながら生活していると、色々なヒントが主から与えられたのです。まず先週の水曜日はいつものように祈祷会を守りました。そこで与えられたのがルカ福音書の第6章27節以下の御言葉でした。同時に、前の週に学んだ20節以下の御言葉も改めて学んだのです。第6章20節以下には、非常に有名な御言葉が記されています。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。人々に憎まれるとき、また、人の子のために追いつき出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである」。私は、主イエスが弟子たちを見て語られた御言葉が、今、大震災で悲しみと不安でいっぱいになっている方々、そして様々な報道を通して心が崩れそうになっている私達にも主イエスが語っておられるように感じます。

聖書研究祈祷会でも申し上げたのですが、主イエスの目から見ると、今泣いている人々、今飢えている人々、そして貧しい人々は間違いなく幸いなのです。何故か？それは、今の悲しみ、今の貧しさ、今の飢え、今の涙から主を求める思いが与えられ、その思いから信仰が成長し、そのことによって洗礼の恵みへ導かれ、結果として神の国に入る事が許されるからなのです。神に国に入るには、その意味からも「多くの苦しみを経なくてはならない」のです。先週の説教でも同じようなことを申し上げましたが、今、愛する家族を失い、電気もなく、薄暗い体育館で寒さや飢えと闘っている方々に向かって、「貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」

と伝えたら、恐らく、怒鳴られるか、無視されるのではないのでしょうか？同時に私自身、このメッセージを主のメッセージではなく、私のメッセージとしてお伝えすることは、出来ないと思うのです。この御言葉を語って下さったのは、主イエスです。十字架で私達の苦しみ、痛みをすべて担って下さり、死んで下さった主イエスが語っておられるのです。だからこそ、この御言葉には真実の響きがあり、同時に今、泣いている人々の心に深く届く御言葉ではないかと思うのです。

福音書記者ルカは、主イエスの御言葉を頭に刻みつつ、今朝の使徒言行録の22節の御言葉、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」を記したと思います。確かに私達は、今の生活に満足してしまうと、主を求める必要がなくなり、同時に、主が十字架で死に、三日後に復活されたという「死への勝利」を私の喜びとして受け止めることが難しいと思うのです。その意味からも、今朝の使徒言行録に記されているパウロのメッセージにも、福音書記者ルカの神学が色濃く反映されているのです。

パウロもバルナバも、第一回目の宣教旅行では多くの実りを経験しました。しかし同時に、実り以上の苦しみも経験したのです。第14章19節以下には、こんなことが書いてありました。「ところが、ユダヤ人たちがアンティオキアとイコニオンからやって来て、群衆を抱き込み、パウロに石を投げつけ、死んでしまったものと思って、町の外へ引きずり出した」。福音書記者ルカは、淡々と記していますが、恐ろしい記述です。パウロが死んでしまったと思えるほど、群衆がパウロめがけて一斉に堅い石を投げつけたのです。これが福音伝道者の厳しさです。とんでもない地震と津波の被害で心を痛めている方々に向かって、もしも私が、避難されている方々が生活している体育館の講壇から大きな声で、「今飢えている皆さんは、幸せですよ！今泣いている皆さんは、幸せですね！」と語りかけたら、石を投げられることはないかもしれませんが、すぐに避難所の外につまみだされると思います。パウロも色々な町で、主イエス・キリストこそ、真の救い主メシアであると語ったのですが、そのことを理解出来ない人々から次から次へと迫害を受けたのです。迫害を受けたのはパウロだけではありません。弟子となったたくさんの方々も洗礼を受けたものの、パウロのように厳しい迫害を受け、身も心もズタズタになっていました。恐らく弟子の中には、「こんなことなら信仰を告白し、洗礼を受けることなどしなければ良かった」と真剣に悩んだ者もいたはずで、パウロとバルナバの耳にも、そうした声が聞こえていました。だからこそ、パウロとバルナバは、リストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返しながらかつて弟子たちを力づけ、そして22節の励まし「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言って、信仰に踏みとどまるように励ましたのです。さらに、弟子たちのために教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せたのです。

パウロとバルナバは、巻末の聖書地図の7パウロの宣教旅行1を御覧頂くとわかりますが、ピシディア州を通り、パンフィリア州に至り、ペルゲで御言葉を語った後、アタリアに下り、そこからシリアのアンティオキアへ向かって船出したのです。アンティオキアは、パウロとバルナバが神の恵みに委ねられて送り出された大切な所でした。パウロとバルナバを乗せた船がアンティオキアに到着すると、彼らはすぐに教会の人々を集めて、報告会を行いました。報告した内容は、神が自分たちと共にいて行われたすべてのこと、そして異邦人に信仰の門を開いてくださったことでした。パウロとバルナバは、伝道の疲れを癒しつつ、しばらくの間、弟子たちと共に過ごしたのです。

冒頭でも語ったように、先週も地震のニュースに接しながら一週間を過ごしました。同時に、園長として初めての一年となった湖畔幼稚園の卒園式を木曜、修了式を金曜に終え、本当に色々なことを考えた一週間となりました。悲しいニュースに心が塞いでいたとき、立派に成長した卒園児たちの堂々とした姿に、大きな励ましを頂きました。同時に、今回の震災で卒園式を行うことが出来なかった東北地方の園児たちのことが頭をよぎったのです。今回の震災で多くの方々の心が塞ぎました。同時に、悲しみの涙が何度も映像で流れていました。その中で私は、このようなときだからこそキリスト者は、「信仰に踏みとどまらなければならない」と思いました。このような悲劇があるといつも考えるのは、「何で神様は、このような悲しみを与えるのか？」ということです。しかし、そのような思いの中で今朝の御言葉を読み続け、また、ルカ福音書に記されている主イエスの御言葉「今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」を聖書研究祈祷会で改めて読んだとき、確かに、今回の震災も、涙が溢れるし、本当にとんでもない出来事である。しかし、もしも今回の震災を通して悲しみの中にある方々の中から一人でも、人間の弱さ、人間の有限性に気づき、同時にその悲しみから全能なる神様、限りのない御方である主なる神に目を向けることが出来たら、本当に感謝なことだ！と心から思ったのです。

今こそ、私達キリスト者は、信仰に踏みとどまりたい。今こそ、伝道者として召された者は、今回の突然の災害で希望を失っている方々に、真の希望であり、真の救い主である主イエスのメッセージ「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」を語り続けることが大切であると思うのです。

今、私達はレント、受難節のときを過ごしています。今、各地の被災地で様々な苦しみを味わっているたくさんの方々、そして私達も今、それぞれに今回の震災を通して大きな心の傷を負っています。しかし、主イエスは、既に私達の悲しみ、私達の苦しみをあの十字架の上で既に経験しておられるのです。その主イエスを父なる神様は、十字架の死から力強く復活されたのです。神様は、何でも出来ます。主イエスは、今も私達と一緒に

生きて働いておられます。どうか、今週もそれぞれに与えられた主からの務めを誠実にな
していくことが出来ますよう、共に祈り続けて参りましょう。

(お祈りを致します)

御在天の主イエス・キリストの父なる神様、今朝も私達一人一人の名前を親しく呼んで下さり、春採教会の礼拝へとお招き下さり、心より感謝致します。主よ、今、日本は、大きな悲しみに包まれています。しかし主よ、あなたはパウロを通して、このように語りかけて下さいます。「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」と。どうか、今、耐えられないような試練の中にある方々に、あなたが溢れるほどの慰めと、励ましを注いで下さい。そして、どうか試練から逃れる道を一日も早く備えて下さい。お願い致します。これらの貧しき願いと感謝とを、私達の救い主、主イエス・キリストの御名によって御前にお献げ致します。アーメン。